

『同盟』一九六四年十一月（全日本労働総同盟）

勤労青少年の教育

矢口 新

（国立教育研究所第二研究室長）

一

わが国では教育といえば学校の教育がすぐ頭に浮べられる。企業内の教育とか、家庭の教育とかということもいわれるが、どちらかといえば第二義的なことと考えられている。労働組合などでも、教育のことに余り関心をもたないのは、教育は学校のなすべきことだという考え方が強いからである。

学校教育というのは、生活に入る前に受けるもので、いわば実際生活に入る準備の意味をもって受けるものであるという考え方が強い。職業をもって受けるものが教育を受けるとするのは、いつてみればよいいなことをやっているのだと考え勝ちである。よいいなこととまでいわないけれども、どちらかといえば特殊なことだという考え方があろう。勤労青少年の教育などというところ、何か特別な人々に対する教育だというように考える人も多い。悪いとはいわないが、誠に御苦労様だという考えである。この考え方は、もう少しはつきりさせると、教育というものは働きながら受けるのは特殊な場合で、働くなどということをお考えない者、いわば職業をもたない者が受けることである。もつと

えば遊んでいるものが行くのが学校だということになる。

このような教育とは学校教育であり、それは働かない者が行く所だという考え方は、日本人の教育についての考え方をゆがめて行く原因であり、日本の教育が本当に発展しない大きな原因となっている。いな、日本の教育が最近まがった方向へ行きつつある大きな原因であるといつてよい。

教育をするとか、教育を受けるとか、或は勉強をするとかいふのは、人間の一生について廻ることであつて、いわばゆりかごから墓場までのことなのである。人間は本来一生の間発展しつづけて行くところに人間らしい意義があるので、若し十五才までで発展がとまって、あとは同じ状態のくりかえしだということになったら、生きて行くことができないであろう。向上というのは人間の希望でもあるけれども、それ以上に本性なのである。向上というのは、言いかえれば、教育されているということである。成長しているということである。意識して勉強していなくても、実際には勉強させられている、生活が自然に勉強になっているのである。年上の者が年下のものにいろいろと注意を与えたりするのは、年の功でそれだけ勉強しているという前提があるのである。しかし一般にそういうことを教育を受けているとか、勉強しているのだというように自覚している人は少ないといつてよい。ただ生活している。そう考えているだけである。しかしそれが教育になつていのである。これは生活の教育性ということである。

この生活の教育性を自覚するとしなないとは、個人的にも、また社会として考えても、ずいぶん大きなちがいが出て来るのではないだろうか。

たとえば人間は環境の産物だというようなことがいわれるが、これは生活の教育性を認めた言葉である。人間は環境によつてつくられる

ということを行っているのである。この生活の教育性は、環境がよい環境であるならば、よい人間がつけられ、悪い環境であるならば悪い人間がつけられるというように解しなければならぬ。とすると例えれば職場という環境は、人間をよくもするし、悪くもするのである。それは両方への可能性をもっている。職場の人々全部でつくっている雰囲気は、その職場の人と個々人に影響して個々人をつくりあげて行くのである。こう考えるとなんだかどうめぐりみたいであるが、これは或る意味で正しい。人間がよくも悪くもなるが、それは、その人間がつくっている社会がよいかわるいかと関係があり、それは個々人がよい社会にしようと考えているかいないかということと関係がある。われわれは一人一人がよい社会をつくろうと努力して行く。それがみんなの力としてまとまって来ると逆に自分にはねかえって来て、自分も向上するのである。自業自得というように考えてもよいのである。

最近勤労青少年のことが問題になって来ているが、若い人たちは、社会から影響を受ける面が強いから、職場の雰囲気は青少年をよくも悪くもするのである。よい勤労青少年を職場に獲得しようとしたら、職場自体がよい社会であることが大切である。

勤労青少年を教育しなくてはならぬなどというが、その教育は、職場からはなれた所で行なわれる教育であって、そこでもっともらしい教育をして行けばよくなるかと単純に考えたなら間違いのものである。職場の外でいくら教育しても、職場にかえっての生活の場が悪い環境であるなら、青少年はよくなるまい。いな、かえって悪くなるのである。教育という表むきの所ではもっともらしく教えられるが、実際はそれと裏腹のことをしているという職場の生活があれば、青少年を二重人格にしてしまつて、裏面のある人間をつくることになる。

労働組合が教育の問題を考える必要はまず第一にこういう点にあるのではないだろうか。教育のことは学校にまかせておく、或は企業の経営者にまかせておくなどと考えていて、本当の生活の中での教育性を考えないと、真に正しい人間をつくることにならない。正しいことを正しく実践できる人間にすることは、経営者であろうが、労働者であろうが同様であつて、それをつくるには、ありとあらゆる場面で首尾一貫してはならない。オンザジョブ、オフザジョブなどというが、そのどちらの場合の教育でも、つまり首尾一貫して生活全体が正しい方向に向つての教育性を發揮してはならないのである。

そういう点が、未来に生きる正しい労働者をつくるためには、職場全体を通じて、教育をどうするかということ、労働組合は労働組合の立場から考えるべきなのである。

もうそういう時期が来ていると思う。そういうすぐれた教育によつて、すぐれた労働者をつくつて行かなくては、これからの社会が維持できないのではないか。

二

わが国の教育観は、さきにも述べたように学校教育を中心にした考え方が強いのである。これは職業につくための教育という色彩が強く、極めて個人主義的な教育である。あらゆる親は、自分の子供をよい学校に入れて、よい成績をとらせて、よい就職口を得させようと考えている。正直の所、教育をそれだけのものとしか考えていないといつてもよい。もつといえ、教育するのはボロいもうけ口にあるようにするためなのである。そういう考え方が、入学試験を生み出し、子供をガムシヤラに引っぱらうとする親を生み出している。教育

は全く個人主義の道具になってしまった。だから、学校を卒業して就職してしまってもう勉強しようとしなない。教育はそれで終わったと考えている。向上するために自覚して勉強しようとするのは変人奇人の扱いをされることになる。世の中で出世をするのは、勉強をして、何か立派な仕事をして、社会に役立つことによつて、世に出るのではなく、何か人を出しぬいて、ズルイことをして、人をおとしいれて、ぬげがけの功名で出世をする、それが世の中だということになる。職場はそういうのがみあい、おとしあな、テンションがうずをまいていて。それが実際の社会だというようなことになってはおしまいである。

しかし今は多分にそういう傾向があらゆる社会に見える。それも口先で立派なことをいういわゆる世の中の指導的地位に立つ人でもそうである。東京都知事というような人でも当選をするためにはインチキキをしている世の中である。そういうことを指導者といわれる人がやつて見せているのだから、若い者がよくなる筈はない。

今の子供は、こう考えてみると、学校へ行くのは、自分がボロい就職口をさがすためだという考え方で教育され、学校を出れば何かうまいごまかしの手をつかって世の中をわたるものだという模範を先輩から示されているといつてもよい。これでよい青少年が生れて来たら奇蹟のようなものである。青少年は世の中の影響をうけて色にそまるのは早い。われわれ大人が本当に正しい社会をつくりあげて、正しい生活の仕方をして、その中で青少年を生活させなかつたら、今後数十年の間つまりわれわれの子供の時代の日本は大へんなことになるのではないか。

勤労青少年の教育の問題はこういう問題として、労働組合でも真剣に考えなければならぬ問題である。そしてそれは、大人の社会がまずもって正しいあり方をしなくてはならぬということを前提としてい

るのである。教育というのは、日常の生活からはなれて、何かもつともらしいことを教えるということではなく、一番力強く影響するのは生活である。つまり生活の教育性である。そのことを土台において、労働組合も教育の根本問題を考えて行かなくてはならぬ所に来てい

三

最近、後期中等教育問題という言葉をよく聞かれると思うが、これは十六才から十八才位の青少年の教育をどうするかという問題である。つまり中学校を卒業して三カ年の教育をどうするかである。この中には、勤労青少年といわれる者の教育も勿論入っている。つまり中学校を卒業して、高校へ進まないで、職業の世界に入ったものの教育である。それは現在までは形の上では定時制高校とか、青年学級とか、さまざまな教育機関があった。それは中学校だけで上級学校へ行けない者に救いの手をのべる学校であるとされていた。所が、それも一皮むくといろいろな問題がある。まず、中学校を卒業して上級へ進まない者は頭がわるいのだという考え方があつた。表むきはそういわないけれども、内心ではそう思っている。そういう生徒が行く定時制などというの、一段低い学校だという通念がある。定時制の卒業生おことわりという職場は多い。つまり差別待遇をするのである。これは実に一般的な考え方である。日本人の考え方の特色である。

この考え方はしかし間違ひである。それを明らかに示すのは、例えば技能オリンピックの成績をみたらよい。そのすぐれた成績をあげた青年達は皆中学校卒業者である。彼等は高校へ進まないけれどもすぐれた技能の持ち主なのである。しかし人はいくかも知れない。彼等は特殊なのだ。そうではなくて、中学校で成績の悪いといわれていた

者も、現在の教育のやり方に合わないだけなのである。つまり、今の学校の教育の暗記式の教育、ただ書物の上の知識だけをおぼえて、試験の答案をうまく書くだけの教育に合わないのである。実際に技術を使った物をつくるような仕事をさせる教育をするなら立派に能力を発揮するのである。このことは学問的にも次第に明らかにされて来ている。教育の方法を一人一人の個性にに応じて、実際に具体的にやることになる、それぞれの方向で人は能力を発揮する。人間の能力は無限にバリエイティをもっていることがわかって来た。つまり個別教育である。

さてこう考えると、現代の教育は、マスプロ式で、十把一からげの教育で、ただ機械的におぼえる教育である。そして試験試験で競争することだけが毎日の仕事になっている。受験準備教育といわれるのはこれである。そこでは人をけとばしてただ点数を争うことだけが考えられている。競争をさせれば、誰かが競争に負ける。負けたものはだめだということになっている。これで一応筋は通るように考えられるから、受験というようなことが行なわれるわけである。しかしその競争はただ観念的な知識を暗記するような点だけの競争なのである。それが教育だと思っているから、誰もそれを認めているのだが、実はそこに問題がある。これはなかなかわかりにくい事であるが、ここに大きな改革の問題がある。

もっと人間を育てる育て方を多彩にしなくてはならない。一人一人の特色をみて、それをのばすような教育制度をつくらなくてはならない。中学校を卒業して、青年期に入った所で、それぞれの青少年が、その境遇と個性に応じて、なんでもよい自分の能力をフルに発揮して世の中のためになるような仕事をおぼえるようにしてやる教育の場所をつくってやらなくてはならない。これが後期中等教育問題といわ

れる問題である。

例えば中学校を卒業して、職場に入ってきた青少年に対しても、職場の生活の中でいろいろと身につけることがある。それをもっと合理的に、科学的にしてやることでまだまだどんどのびるであろう。お前はだめだなどという取扱いをすればだめになってしまふし、のばさうとすればいくらでものびる。そういう考え方を職場がもつかもたないかでそれはきまるのである。そうして実力をのばしてやれば、それは職場の中の教育であろうと、高等学校であろうと、待遇に差別をつける必要はない。つまり実力によって、待遇してやればよいのである。

つまり実力主義の職場にする。実力を正しく認めてやる職場にする。学歴主義で、就職の時に学歴が高いから、それがその後三十年間ずっと意味をもっているなどという馬鹿げたことをなくさなくてはならない。勉強をして、それによって、社会に貢献したものが正しく認められて行く社会にしておかないと、社会がだらくするであろう。

こう考えると、勤労青少年の教育を正しくつくりあげ、それを正しく位置づけることは、もっとも教育の本筋にかなったことになるのである。このような教育の筋が本道になって十六才から十八才の青少年の教育が全体として考え直されなくてはならぬ。あらゆる職場の先輩たちは、自分たちの後輩をいかに導いて、正しいよりよい社会をつくるようにするかを具体的に考えなくてはならないのである。現在の職場のもっている不合理さ、欠陥を直すとともに、次に来る青少年をして、よりすぐれた社会を建設させるように努力しなくてはならぬ。そういう意味で、労働組合が教育問題に真剣にとりくむ必要があるのである。教育は、学校にまかせておけばよいという時代はすぎたのである。教育は、正しい社会をつくりあげる最も意味のある仕事なのである。